

俳句の中の鳥獣戯画（一）

池田亮二

俳句にも、対象を何か動物や物などに見立てる、あるいは隠喩として表現する修辞法があります。そうすることで自分あるいは同類の卑俗なものを花鳥風月の中に同化させて置き、それを別の自分が観察し描写する思考の遊びですが、その見立てによって時に対象とする卑俗なものを詠嘆したり、ほめたりからかったりもする。ときにそれは謎かけめいて、はじめはさっぱりわからず、三日も経ってから笑い出すというのもあります。

打よする浪や千鳥の横歩き

蕪村

浜辺でたわむれる可憐な千鳥の群れを詠んだものと大方はその情景を思い浮かべます。ところが、前書きを見ると「ある夜、太祇と柳風呂という娼家にのぼりて」とある。してみるとこれは酔客二人色街をぞめき歩く千鳥足の寓意でもあるでしょう。たしかに千鳥はカニ歩きはしないはず。

公達に狐化たり宵の春

蕪村

花の世を無官の狐鳴にけり

一茶

椋鳥と人に呼るる寒さ哉

一茶

同じ花の下でも、蕪村の狐は公達に化け、一茶は自身が無官の狐に化けます。信州の農家の長男に生まれながら、継母に追われる如く十四歳で江戸に出てきた「椋鳥」は、奉公先を転々としながら見よう見まねで俳句を詠み始めます。一っぱしに人に知られるようにもなり選集も出し弟子も増えましたが、それでも妻も家ももたない行脚俳人で諸国を徘徊し、「月花や四十九年むだ歩き」を続けました。

どう追れても人里を渡り鳥

一茶

一茶にはこういう自虐の句が多いようです。いつか江戸前の宗匠になって一派をなそうという野心はあったものの、結局一茶の句は江戸の風雅、粹、清楚とは対極の質朴な野趣の世界にあったのです。そして行き着いたのは終の栖、雪五尺の故郷信濃でした。花のお江戸で正一位稻荷大明神のお使いの狐になるより、

裸一貫の野狐の方がおらには似合っているさと。花の下で猿や狸と踊っている一茶がいます。

飼猿も秋はことさら山の声

内藤丈草

これを見立ての句と見るかどうか、いささか迷います。飼猿というのは宮仕えで振り回された丈草自身ではないか。丈草は貧乏武士の倅でしたが、たまたま父の姉が尾張犬山藩々主に見染められて愛妾になったことから妾腹の従兄弟である若君に仕える身となる。大出世ということか。だがその若君が精神を病み、伯母の死もあって運命は暗転する。そうした浮き沈みと身内の争いに嫌気がさしたのか、丈草は二十七歳という若さで出家遁世する。「多年屋ヲ負フ一蝸牛化シテ蛞蝓トナリ自由ヲ得…」という偈を残して。もともと世事には無関心で幼少から漢詩俳諧に親しんできた彼は、芭蕉に出合い師事してからは俳禅一筋、蕉門の十哲の一人と目されるに至るのです。芭蕉の死後はその喪に服して三年、以後山門に閉じこもって終生人との交わりもなかったといえます。自由の身となった飼猿の自在で洒脱な心境で読んだ句、それが山の声としてひびく。

世の中を投出したる団扇哉

丈草

ぬけがらに並びて死ぬる秋の蟬

丈草

団扇も蟬も丈草自身のことと思われる。